

デジタルネイティブ世代の情報行動 —日本とマレーシアの大学生の比較から—

村山大樹 (文教大学教育研究所客員研究員)・今田晃一 (文教大学教育学部)
手嶋將博 (文教大学教育学部)

Information Behavior in Digital Native Generation -From Comparison of University Students in Japan and Malaysia-

TAIKI MURAYAMA*, IMADA KOICHI **
TESHIMA MASAHIRO ***

(*Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University /

Faculty of Education, Bunkyo University/ Faculty of Education, Bunkyo University)

要旨

デジタルネイティブ世代と呼ばれる大学生は、一般的に映像優先脳、感覚主義、私生活中心主義などがその特徴とされている。橋本らの「日本人の情報行動 2010」の調査を基に、日本の大学生(教員養成系)とマレーシアの大学生について情報行動についてのアンケート調査を実施した。結果、日本の大学生は、メールやSNSのコミュニケーション、授業の課題についての調査など、多くのことをスマートフォン1台で処理する傾向があった。学業などでは特に、一次資料につながる適切な指導が課題として明らかになった。

1. はじめに

現在学校教育の現場においては、2006年のIT新改革戦略、2009年のスクール・ニューディール構想を始め、学校におけるICT環境の整備が着実に進められている。

とりわけ、2013年6月に閣議決定された高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部(IT総合戦略本部)の「世界最先端IT国家創造宣言」¹⁾において、「学校の高速ブロードバンド接続、1人一台の情報端末配備、電子黒板や無線LAN環境の整備、デジタル教科書・教材の活用等、初等教育段階から教育環境自体のIT化を進め、児童生徒等の学力の向上とITリテラシーの向上を図る」とともに、「2010年代中には、全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で教育環境のIT化を実現するとともに、学校と家庭がシームレスでつながる教育・学習環境を構築する

という具体的な目標が掲げられている。

こうした環境整備が進む中で、これからの教員を目指す大学生の世代は、一般にデジタルネイティブと呼ばれている。デジタルネイティブとは、物心ついた時から生活の中に様々な情報機器があり、それを場面に応じて使い分けることを当たり前に行っている世代のことである。その特徴として、一般的に映像優先脳、感覚主義、私生活中心主義などがそのキーワードとして挙げられており、これからは、こうしたデジタルネイティブ世代が教員として学校教育を担うことになっていく²⁾。

筆者らは、これまでデジタルネイティブ世代のデジタル活用能力に注目し、実践研究および実態調査を行ってきた^{3)~4)}。

本研究では、教員を目指す大学生への情報行動に関する調査を基に、同調査をマレーシアの大学生に行った結果と比較することを通

じて、その特徴を整理し、学生や若手の先生の持つ力を教育に活かす方法を考える一助とすることを目的とする。

2. デジタルネイティブの特徴

(1) デジタルネイティブとは

「デジタルネイティブ」という表現は、物心付いた時にはPCやインターネットが身の回りにあり、これらを当たり前を使いこなす世代を指して使われる。橋元他の「日本人の情報行動 2010」の研究⁵⁾では、デジタルネイティブを「76世代」「86世代」「96世代」に区分し、1996年生まれ前後の「96世代」をネオ・デジタルネイティブと名付け、前世代よりもモバイル化が先鋭された世代として分析している。

ここでいう「情報行動」とは、「人びとのメディア利用行動やコミュニケーション力行動」と定義している⁶⁾。本研究で用いたアンケート調査は、橋本らの「日本人の情報行動 2010」のアンケート調査を踏襲して行ったものである。

ネオ・デジタルネイティブについては「映像処理優先脳を持ち、視覚記号を平行に処理するのに長け、モバイルを駆使して情報をやりとりし、情報の大海にストックされた『集合知』を効率的に利用し、これまでの、言語情報中心にリニアなモードで構成されてきた世界観を変えていく(若者)」と分析している。

(2) 各研究者による学生(ネオ・デジタルネイティブ世代)の研究

こうしたネオ・デジタルネイティブ世代を対象とした実践研究も報告され始めている。

加藤ら⁷⁾は、メールのやりとりに関する実態調査から、学生が相手を配慮したコミュニケーションを図ろうとしている実態を明らかにした。

また、立野ら⁸⁾は、大学の情報処理科目において、学生が電子メールを使用する機会を

増やし、教員から学生へのメールがよりくだけた表現であると、コミュニケーションが促進されることを確かめた。

さらに、研究で行ったパソコンメールとケータイメールに関するアンケートから、「①現代の大学生にとって、パソコンメールを使用する頻度は大変少なく、ケータイメールの使用が大部分を占めている。②パソコンメールとケータイメールの違いに関する理解や両者の意識的な使い分けについて、十分に身に付いているとは言えない」ことを明らかとした。

一方、遠山⁹⁾は、地域コミュニケーション実態の解明をめざし、地方大学へ通う18～26歳までの大学生「住民」への質問票調査を通して、彼らの日常的なメディア接触、居住地域への関心度、地域情報収集におけるメディア利用等の実態およびその傾向を明らかにしようとした。

分析の結果、デジタルネイティブとなる現在の大学生は、インターネットサービスを積極的に利用している現状が判明したが、地域情報収集においてはロコミと地元マスメディア情報に依存している傾向が読み取れた。

これらの研究から、現在の学生は、携帯メールとインターネットを中心とした情報行動とともに、身近な相手との直接のやりとりや相手への配慮を大切にしている姿が明らかとなってきた。

(3) これからの若手教員に求められる力

平成25年6月、「教育分野における効果的なICT利活用を推進するための調査研究」¹⁰⁾が示された。

そこでは、「ICT機器に実際に触れた経験のある新任教員が、地域内の学校へ赴任することで、地域全体の情報化推進につながる事が期待できる」と述べられており、これからの若手教員には、教育におけるICT活用の分野で大きな期待が寄せられているのが現状である。

こうした背景を踏まえ、これから教員を志

望する大学生の情報行動の特性を理解し、そのよさを生かすための留意点を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、日本の大学生とマレーシア大学生に対して行った、情報行動に関する調査の結果を比較することで、日本の教員志望の学生のデジタル機器利用に関する特性等を明らかにすることを目的とする。

3. 大学生のデジタル機器利用に関する調査

(1) 調査目的

2013年9月現在、文教大学教育学部心理教育課程に所属する大学生の情報行動の実態を明らかにし、今後の教育活動に活かせる視点を考察することを目的とする。

(2) 調査方法

- ・ 質問紙調査
- ・ 実施日：2013年9月17日
- ・ 調査対象：文教大学教育学部心理教育課程2年生100名、4年生10名、計110名
- ・ 回収率：100%

(3) 調査結果

問1では、デジタル機器の所有について訊ねた。

調査の結果、機器の所持・利用率では、テレビ（98.2%）、パソコン、スマートフォン（95.4%）が高く、携帯電話（15.6%）、タブレット端末（11.9%）が1割程度に留まっていた。

この結果から、パソコンとスマートフォンを場面に応じて使い分けて利用していることが考えられる。

問2では、パソコン、スマートフォン、タブレット端末の利用方法についてたずねた。

調査の結果、パソコンでインターネットのサイトを利用する（95.5%）、スマートフォンでメールを送ったりする（95.4%）、スマートフォンでインターネットのサイトを利用する（95.4%）が9割を超えていた。

他方、タブレットの利用についてはメール（4.6%）、インターネット（11.0%）共に低いことが明らかとなった。

問3では、SNSの利用についてたずねた。

調査の結果、LINEの利用は全ての学生が利用したことがあると回答し、次いでTwitter（81.9%）、Facebook（47.3%）であった。いずれも、スマートフォンを使って、簡単に他人とコミュニケーションを図ることができるSNSである。

一方、GREE（8.2%）やMobage（7.3%）といったゲームを中心としたSNSは利用が1割程度にとどまっていた。

問4では、SNSの利用方法について、それぞれ1日に行う回数をたずねた。

調査の結果、他人の投稿を閲覧する（87.2%）が最も高く、1日数回以上行う者が76.3%であった。次いで、他人の投稿にコメントする（82.8%）、自分の気持ちや日々の出来事の投稿する（81.9%）、であった。

他者の投稿を見て、それにコメントすることがまず中心であり、自分もアップする情報があれば投稿するという利用が多いことが明らかとなった。

問5では、特定の情報を得るための情報源としたものをたずねた。

調査の結果、テレビの利用が時事ニュース（74.0%）、スポーツニュース（69.7%）、気象情報（56.7%）で高かった。また、インターネットの利用がグルメ（40.7%）、ショッピング（40.3%）、旅行・観光（44.0%）で高かった。一方、新聞、ラジオはいずれの情報についても低い利用にとどまった。

問8では、生活に関する各質問に対し、どのように考えるかたずねた。

調査の結果、政治に関する質問では、政治よりも自分たちの生活を大切にする傾向が見られた。他人への信頼に関する質問では、他人への信頼度が高く、身近な人々を大切にする傾向が見られた。

自己犠牲・奉仕性に関する質問では、他者や弱者へ貢献しようとする傾向が高く見られた。

問9では、現在の自身の幸せ度についてたずねた。

調査の結果、現在の自身を幸せと捉えている者が81.1%で、肯定的に捉えている者が多いことが明らかとなった。

問10では、特定の他者との人間関係に対する満足度をたずねた。

調査の結果、満足と答えたものが、家族(87.3%)、友人(96.4%)、会社や学校での人間関係(84.5%)で、身近な人間関係に満足している傾向が強いことが明らかとなった。特に友人関係は、今回の調査では不満に感じている者はいないという結果であった。

問11では、情報を得るための手段として、各メディアがどのくらい重要であると考えているかたずねた。

調査の結果、情報を得る手段としてもっとも重要であると考えられているのはテレビ(95.5%)で、次いでインターネット(87.3%)であった。一方新聞、雑誌は低く、情報の重要度には偏りが見られた。

問12では、楽しみを得るための手段として、各メディアがどのくらい重要であると考えているかたずねた。

調査の結果、楽しみを得る手段としてもっとも重要と考えられているのはインターネット(97.3%)で、次いでテレビ(93.7%)であった。新聞の重要度は13.6%と低かった。

問13では、4つのメディアの情報について、信頼できる情報はどの程度あると思うかたずねた。

調査の結果、信頼度をもっとも高いのは新聞(84.6%)、次いでテレビ(70.1%)であった。問11で重要な情報源とされていたインターネットであったが、その情報の信頼度は高くなく(15.5%)、信頼できる情報は半々くらいと答えたのが58.2%であった。

問14では、目的に応じてどのメディアをもっとも利用しているかたずねた。

調査の結果、いち早く世の中のできごとや動きを知るために、もっとも利用されているのはインターネット(60.0%)、次いでテレビ(38.2%)であった。

世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得るために、もっとも利用されているのはテレビ(57.3%)、次いで新聞(30.0%)であった。インターネットの利用は(8.2%)だった。

趣味、娯楽に関する情報を得るために、もっとも多く利用されているのはインターネット(84.6%)、次いで書籍(15.5%)であった。

問15では、他人とのコミュニケーションについて、目的に応じてどのような手段をもっともよく利用しているかたずねた。

調査の結果、友人との形式的な情報交換でもっとも利用されているのはインターネットのコミュニケーションサービス(56.9%)であり、LINEの回答が大多数であった。次いで多かったのは携帯電話のメール(33.0%)であった。

おしゃべりや世間話のためにもっとも行われていたのは、直接会って話す(62.7%)、次いでインターネットのコミュニケーションサービス(29.1%)であった。おしゃべりや世間話では、直接のコミュニケーションを大切にしていることが明らかとなった。

目上の人に頼みごとをするためにもっとも行われていたのは会って話す(45.9%)、次いで携帯電話のメール(32.9%)であった。友人との情報交換はLINEが多かったのに対し、正式な場面ではメール(携帯電話)を用いるという傾向が明らかとなった。

問16では、普段の生活の中で(1)~(12)のようなことが、どれくらいあてはまるかたずねた。

(1)では、興味・考え方に違いがある事を感じているが、53.7%であった。

(2) では、友人に何でも話せるが、55.6%であった。

(3) では、他人に追い越されそうだという不安を抱えているが59.3%であった。

(4) では、やらなければならないことに追われているように感じているが、64.8%であった。

(5) では、人と一緒にいるのが好きであるが、89.8%であった。

(6) では、人づきあいの機会があれば喜んで参加するが、75.9%であった。

(7) では、世間より自分の身の回りのできごとに興味があるが、72.2%であった。

(8) では、普段から政治に対して関心があるが、17.6%であった。

(9) では、いつも友人や知人とつながっているという感覚が好きが、62.1%であった。

(10) では、自分の意見や気持ちを文字で発信することに喜びを感じるが、29.6%であった。

(11) では、困っている人を見るとつい手助けしたくなるが、90.8%であった。

(12) では、悲しんでいる人を見たらなくさめるが、93.5%であった。

問17では、情報の発信元について、どの程度信頼しているかをたずねた。調査の結果、中央官庁(74.8%)、地方行政(80.6%)、警察(79.4%)、気象庁(86.9%)、大学研究者(82.3%)と、公共性をもつ発信元については、高い信頼をもっていることが明らかとなった。一方で、マスコミは26.9%であり、テレビやインターネットの情報を重視している実態とねじれが生じていることが分かった。

4. 日本とマレーシアの大学生の比較

(1) アンケート調査結果の比較

問1では、デジタル機器の所有について訊ねた。結果を表1に示す。マレーシアの大学生は、マレー工科大学で選択授業の「日本語」の授業を履修している1年生～3年生を対象に行った。アンケート調査は、英語に翻訳したものをを用いるとともに、アンケートを実施する前に、その趣旨等を説明するとともに、質問のあった項目についてはその都度解説を加えた(写真)。



写真 マレーシアの大学生へのアンケート調査

調査の結果、テレビ、DVD・ブルーレイ、携帯ゲーム機、テレビゲーム機、携帯電話の所持に有意な差が見られた。有意差が見られたものの中では、携帯電話のみマレーシア大学生の方が所持率が高かった。

表1 デジタル機器の所持利用についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) テレビ受像機	1.06	1.99	**
(2) DVD・ブルーレイ	1.28	2.20	**
(3) パソコン	1.06	1.06	n. s.
(4) 携帯型ゲーム機	1.95	2.81	**
(5) テレビゲーム機	2.06	2.67	**
(6) 固定電話	1.71	1.79	n. s.
(7) スマートフォン	1.12	1.30	n. s.
(8) 携帯電話	2.60	1.96	**
(9) タブレット端末	2.87	2.67	n. s.

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

この結果から、日本の大学生は、日頃から多くのデジタル機器に触れているということが明らかとなった。

問2では、パソコン、スマートフォン、タブレット端末の利用方法についてたずねた。調査結果を表2に示す。

表2 パソコン・スマートフォン・タブレット端末の利用方法についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) パソコンでメール	1.35	1.01	**
(2) パソコンでインターネット	1.05	1.00	*
(3) 携帯電話でメール	1.85	1.71	*
(4) 携帯電話でインターネット	1.89	1.63	**
(5) スマートフォンでメール	1.05	1.34	**
(6) スマートフォンでインターネット	1.05	1.18	**
(7) タブレット端末でメール	1.95	1.77	**
(8) タブレット端末でインターネット	1.89	1.69	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

検定の結果、全ての項目で有意差が見られた。スマートフォンでのメールやインターネットの利用において、日本の学生の利用率が高かった。

この結果から、日本の大学生のスマートフォン利用の高さが明らかとなった。

問4では、SNSの利用方法について、その頻度をたずねた。調査結果を表3に示す。

表3 SNSの利用方法についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) 他人の投稿を閲覧する	1.57	1.10	**
(2) 自分の気持ちや日々の出来事を投稿する	2.16	1.81	n. s.
(3) 自分が持っている知識や意見を投稿する	2.48	1.36	**
(4) 他人の投稿の引用(シェアやリツイート)	2.40	1.84	*
(5) 他人の投稿にコメントする	2.65	2.09	**
(6) 他人の投稿への共感を示す(「いいね!」など)	2.11	1.55	**
(7) 他のサイトのニュースや記事の引用(シェアやリツイート)	2.38	1.30	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

検定の結果、ほとんどの利用方法においても有意差が見られた。全ての項目において、日本の学生の利用頻度が高かった。

この結果から、日本の学生のSNS利用の高さが明らかとなった。

問8では、生活の中での意識について、どのように考えるかたずねた。調査結果を表4に示す。

表4 生活の中での意識についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) 政治のことよりも自分の生活のほうが大事だ	1.97	1.72	*
(2) われわれが少々騒いだところで政治はよくなるものではない	2.02	2.28	*
(3) 政治のことは難しく自分にはよくわからない	1.95	2.12	n. s.
(4) 私は人を信頼するほうである	1.79	2.18	**
(5) 人を助ければ、今度は自分が困っている時に誰かが助けてくれる	1.82	1.97	n. s.
(6) 受けた恩は必ずしも返さなくてもよい	3.18	2.86	**
(7) 自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない	2.91	2.65	*
(8) 人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい	2.65	3.06	**
(9) 社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである	1.90	1.62	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

有意差が見られた項目の中では、他者への信頼や自己犠牲の項目では日本の学生が有意に高かった。報酬を求めない、社会的支援の項目では、マレーシア学生が有意に高かった。

この結果から、日本の学生は、近い関係の者同士がお互いに助け合おうとする気持ちが高いことが考えられる。

問9では、現在の自身の幸せ度についてたずねた。調査結果を表5に示す。

表5 現在の生活の幸せ度についての比較

	日本	マレーシア	有意差
幸せ度	7.75	7.20	*

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

幸せ度については日本の学生の方が有意に高い結果となった。

問10では、特定の他者との人間関係に対する満足度をたずねた。調査結果を表6に示す。

表6 人間関係の満足度についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) あなたの家族との関係	1.73	1.70	n. s.
(2) あなたの友人との関係	1.53	2.05	**
(3) 会社や学校での人間関係	1.86	2.42	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

検定の結果、友人との関係、会社や学校での人間関係に対する満足度において、日本の学生の学生が有意に高かった。

この結果から、日本の学生が身近な人間関係を大事にしていることが考えられる。

問11では、情報を得るための手段として、各メディアがどのくらい重要であると考えているかたずねた。調査結果を表7に示す。

表7 メディアの重要度についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) テレビ	1.41	2.23	**
(2) 新聞	2.97	1.94	**
(3) 雑誌	3.36	3.01	*
(4) インターネット	1.68	1.38	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

調査の結果、日本の学生はテレビやインターネットの情報を重要と捉える傾向があるのに対し、マレーシア学生はインターネットと新聞の情報が重要と捉える傾向があることが明らかとなった。検定の結果、全ての項目で有意差が見られた。テレビの重要度において日本の学生が有意に高かった。

この結果から、日本の学生がテレビの情報を重要と捉えていること、新聞や雑誌の情報をそれほど重要と感じていないという特徴が明らかとなった。

問12では、楽しみを得るための手段として、各メディアがどのくらい重要であると考えているかたずねた。調査結果を表8に示す。

表8 楽しみを得るための重要度についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) テレビ	1.40	2.09	**
(2) 新聞	3.79	2.53	**
(3) 雑誌	2.35	2.78	**
(4) インターネット	1.35	1.27	n. s.

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

調査の結果、両者とも楽しみを得るための手段としてインターネットをよく活用していることが明らかとなった。検定の結果、テレビ、新聞、雑誌で有意差が見られた。新聞については、マレーシア学生の利用が有意に高かった。

問13では、4つのメディアの情報について、信頼できる情報はどの程度あると思うかたずねた。調査結果を表9に示す。

表9 メディアの信頼度についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) テレビ	2.30	2.50	n. s.
(2) 新聞	2.13	2.50	**
(3) 雑誌	3.19	3.06	n. s.
(4) インターネット	3.11	2.53	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

調査の結果から、マレーシア学生はテレビ、新聞、インターネットの情報の信頼度が同じくらいであるのに対し、日本の学生はバラつきがあることが明らかとなった。検定の結果、新聞とインターネットに有意差が見られた。新聞は日本の学生が有意に高く、逆にインターネットは低かった。

問16では、普段の生活のなかでの考え方をたずねた。調査結果を表10に示す。

表10 生活の中での考え方についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) まわりの人たちと興味や考え方が合わないと 思うことがよくある	2.41	1.99	**
(2) 友達には何でも相談できる	2.42	2.15	**
(3) まごまごしていると他人に 追い越されそうだと、という不安を感じる	2.30	2.21	n. s.
(4) いつもやらなければならないことに 追われているように感じる	2.18	1.76	**
(5) 人と一緒にいるのが好きである	1.66	1.80	n. s.
(6) 人づきあいの機会があれば、喜んで参加する	2.06	2.20	n. s.
(7) 世間のできごとより、自分の身の回りの できごとに興味がある	2.12	1.97	n. s.
(8) ふだんから政治に対して 関心がある	3.02	2.99	n. s.
(9) いつも友人や知人とつながっているという 感覚が好きだ	2.27	2.14	n. s.
(10) 自分の意見や気持ちを文字で発信すること に喜びを感じる	2.76	2.32	**
(11) 困っている人を見ると、つい手助けしたくなる	1.89	1.65	**
(12) 悲しんでいる人を見たらなぐさめる	1.79	1.80	n. s.

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

問17では、各対象についてどの程度信頼しているかたずねた。調査結果を表11に示す。

表11 情報元の信頼度についての比較

	日本	マレーシア	有意差
(1) 中央官庁	2.24	2.44	*
(2) 地方行政	2.19	2.49	**
(3) 警察	2.02	2.60	**
(4) 気象庁	1.83	2.13	**
(5) 大学研究者	2.09	1.95	n. s.
(6) マスコミ	2.89	2.26	**

*p<0.05 **p<0.01 n. s. (有意差なし)

検定の結果、中央官庁、地方行政、警察、気象庁、マスコミについて優位な差が見られた。マスコミのみマレーシアが優位に高かった。この結果から、日本の学生の公の情報に対する信頼度が高いことが明らかとなった。

(2) 日本の大学生の特徴についての考察

ここまで、日本とマレーシアの調査結果の比較をまとめてきた。これらの結果から、①情報機器所持・利用方法、②情報の扱い方、③人間関係の3つの視点から考察を行う。

情報機器の所持・利用については、日本の学生は、様々な機器を所持しながら、特にスマートフォンをメインのデバイスとして利用し、必要に応じてパソコンと使い分けて利用しているものと考えられる。スマートフォンの所持、利用については、マレーシア学生の利用率も高く、両者に有意差は見られなかった。このことから、学生世代、いわゆるデジタルネイティブ世代にとって、スマートフォンの利用は当たり前なものとなっていることが明らかになった。

また日本の大学生の情報源としては、インターネットが大きなウェイトを占めている。雑誌や新聞の活字よりも、すぐに調べられるインターネットを好んで活用していることが示唆された。まずインターネットを活用し、それに加えてテレビ、新聞、書籍を目的に応じて使い分けていることが特徴といえる。

情報源として重要な位置を占めるインターネットであるが、同時に情報の信頼度に関しては低いと認識している。逆に使用頻度の低かった新聞は、信頼度は高いと評価している。

情報の発信元としても、国や省庁、大学など、公的な組織への信頼が高く、マスコミの評価が低いという特徴がみられた。

ここに日本の学生の情報の収集の仕方にねじれが生じていることが考えられる。不確実であると分かりつつも、多くの情報をまずはインターネットから入手している。そしてその先の、深めるための具体的な手段が身につけていないのが現状である。インターネットを情報収集の入り口として、その中から必要な正しい一次情報へとつなげる技術と方法を、大学の授業の中で適切に指導する必要があると言える。これらの技能は、そのまま児童

生徒に身に付けさせるべきコンピテンシーでもあり、緊要性のある課題である。

次に人間関係については、安定した人間関係の中で、身近な人々との関係を促進し、さらに広く情報を発信しようとする特徴がみられた。デジタルでのコミュニケーションでは、身近な人々に関する情報の把握を中心としながら、自分の情報の発信も行っている現状が明らかになった。

ただし、常に携帯・スマートフォンを利用している訳ではなく、事務的な情報交換は、メールやLINEで、目的のない会話などは直接会って行っていることが特徴である。

正式な相談事などは、きちんと挨拶にいき、メールを使って連絡を取るという使い分けも考えて行動していることが明らかとなった。

携帯電話からのメールが多いのが特徴であるが、スマートフォンによってPCメールを利用することが可能となり、わざわざパソコンを開かずにメールを行うことが多くなったことによるものと考えられる。

人間関係については、身近な人間関係を大切にしているという点に日本の大学生の特徴がみられた。

政治や世界への関心はマレーシアの大学生に比べてやや低く、身の周りでの出来事や関係を重視していることが明らかとなった。ただ、友人や家族との関係への満足度は高く、考え方の違いから生じる葛藤や不安が少ない傾向があることが認められた。

これらの特徴は、あくまでも日本の大学生が教員養成系であること、マレーシアは多民族国家であることの事情から、メディアを活用したコミュニケーション行動の特徴がその比較から顕著になったと言える。ただ日頃これらの学生と接している筆者らが、感覚的に今の学生に感じているデジタルネイティブ世代としての特性を再認識する結果となった。

将来教員を目指す学生が、こうしたメディアを適切に活用し、人間関係を築いていける

ことは教員としての資質・能力として重要であろう。

人と一緒にいたり、人付き合いの場に積極的に参加する姿勢はマレーシアの大学生と同様の傾向であったが、他者への貢献性、奉仕性では金銭的な報酬ではないが、何らかの見返りを求めるような特徴も見られた。

最後に本研究でマレーシアの大学生の比較から得られた日本の大学生の特徴を表12に簡潔にまとめる。

表12 日本の大学生の特徴

	特徴
情報機器の所持・利用	<ul style="list-style-type: none"> ・数々の情報機器を所持 ・スマートフォンの利用が中心
情報の扱い	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットが中心 ・目的に応じて、テレビ、新聞、書籍などをインターネットと組み合わせて利用する ・身近な人々の情報把握が中心 自分の情報は少し世界を広げるための発信
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な関係を大切にする ・友人や家族関係の満足度は高い傾向 ・人づきあいに積極的 ・自分の行った活動には相応の見返りを求めて良いと考える

おわりに

本研究では、日本とマレーシアの大学生に行った情報行動に関する調査結果を整理し、日本の大学生（特に教員養成系）の特徴を考察した。

各調査の検定の結果、大学生のスマートフォンを中心とした情報機器の利用、インターネットと他媒体を組み合わせる情報の入手方法、安定した人間関係と人づきあいの良さ、身近な関係を大事にする傾向といった特徴が明らかになった。これらの特徴は、中学生の段階からある程度見られる傾向である¹¹⁾。

自由研究

また課題としては、インターネットによる情報収集に偏重があり、さらに情報の処理、発信のために、情報を深め、一次資料へとつながる適切な指導が必要であることも明らかになった。

謝辞

本研究の調査協力校として、埼玉県越谷市立大袋中学校の先生方、文教大学教育学部心理教育課程学生の皆様、そしてマレーシア工科大学のクマラ・グル先生には多大なるご協力を賜りました。記して深謝いたします。

付記

本研究は、平成25年度湘南総合研究所共同研究費「デジタル・ネイティブ世代のデジタル・メディアに関する意識調査（研究代表：今田晃一）」の一部および、平成25年度科学研究補助金基盤研究（B）「東アジア等との関連性を踏まえた日本の防災・減災教育の展開と課題（研究代表：藤岡達也）」の一部を用いて行ったものである。

文献

- 1) 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部「世界最先端IT国家創造宣言」(2013)
- 2) 今田晃一・横山美智子・村山大樹「協働学習につながるICT活用の留意点-iPadを用いたワークショップの試みから-」『教育研究ジャーナル』文教大学大学院教育学研究科、Vol.6、No.2、pp.15-16 (2014)
- 3) 今田晃一・村山大樹「幼児教育におけるデジタルの可能性-デジタル絵本(iPad用)の作成と実演を中心として-」『教育

研究ジャーナル』、Vol.6、No.1、pp15-16 (2013)

- 4) 村山大樹・今田晃一「中学生のデジタル機器利用に関する調査-越谷市立大袋中学校における全校調査を中心として-」『教育研究ジャーナル』、Vol.6、No.1、pp17-18 (2013)
- 5) 橋本良明編『日本人の情報行動2010』、東京大学出版、pp347-361 (2011)
- 6) 橋本良明編、同掲書、pp2-3
- 7) 加藤由樹・加藤尚吾・窪田尚・立野貫之「テキストコミュニケーションにおいて長く続くやりとりを終えるためのメッセージ内容の工夫に関する調査」『教育情報研究』日本教育情報学会、第29巻、第1号、pp.21-30 (2013)
- 8) 立野貫之・加藤由樹・加藤尚吾「情報処理科目の授業における電子メールのやりとりに関する実践がその後の学生の自発的な電子メールの使用に及ぼす影響」『教育情報研究』日本教育情報学会、第28巻、第1号、pp.3-10 (2012)
- 9) 遠山茂樹「地方大学生における地域コミュニケーション状況に関する調査研究 -高知県下の大学生を対象に-」『情報文化学会誌』情報文化学会、第20巻、第2号、pp.43-50 (2013)
- 10) 株式会社内田洋行「教育分野における効果的なICT利活用を推進するための調査研究」(2014)
- 11) 村山大樹・今田晃一・小川美奈恵「デジタル機器利用に関する調査-大学生と中学生の比較から-」『教育研究ジャーナル』文教大学大学院教育学研究科、Vol.6、No.2、pp.13-14 (2014)